

高校生の語彙力と読解方略の関連

— 2校間比較から —

澤口 真理*・瀬戸美奈子**

**The Relation Between Vocabulary And Reading Strategies of High School Students:
The Comparison Between the Two Schools**

Mari SAWAGUCHI and Minako SETO

要 旨

文章読解はすべての学習の基盤となり、高校卒業後の学びを継続するために必要である。本研究では高校生の語彙力と読解方略の関連を検討することを目的とする。高等学校は入学者選抜によって学力、特性に応じた区分がされていることから「就職と進学のどちらにも対応する高校」と「進学に対応する高校」の2校の高校生を対象に検討を行った。その結果、「就職と進学のどちらにも対応する高校」では語彙力と読解方略には相関は見られなかった。「進学に対応する高校」では読解方略のうち「既有知識活用」に中程度の正の相関が、「構造注目」「意味明確化」「モニタリング」に弱い正の相関がみられた。また、t検定による分析の結果、A高校では文章の語句や内容を記憶して、自分の理解状態をモニタリングしながら文章読解をしていることが推測された。

キーワード：高等学校 国語科 語彙力 読解方略

I 問題と目的

近年、大学生の中途退学が社会的問題となっている。JILPT (2015) によると国公立私立大学、公私立短期大学、高等専門学校の中途退学者の総数は、全学生数（中途退学者、休学者を含む）2,991,573 人のうち2.65%にあたる79,311人である。中途退学の理由としては①経済的理由16,181人（20.4%）、②転学12,240人（15.4%）、③学業不振11,503人（14.5%）であり、学業不振は例年、常に一定の割合を占めている。20代においては中退者の6割が一度も正社員経験がないという調査結果もあり（JILPT, 2015）、子どもたちが個々の能力に応じて社会参加し、自立して生活できる社会人となるために、中退を未然に防ぐ支援を行うことは急務だと言えよう。

学力不振を要因とする学生に対する支援は大学教育現場において始まっている。2005年3月に日本リメディアル教育学会が設立された。これは大学生の基礎学力が急激に低下していることに対し、大学現場での早急な支援が必要であるという問題意識の共有の発現であると言える。

高等学校においても、高校生が進学先での学びを継続するための支援が求められている。

文章読解は学校教育においてすべての学習の基盤となるものである。筆者は高等学校国語科の教員であり、高校生に必要な学力保障について、文章読解の側面から支援したいと考えている。なお、高校卒業後の学問研究や職業人として必要な専門的知識の涵養、社会人として読むことを必要とされる文章は説明的文章であることが多いと考えられることから、本研究における

* 三重大学大学院教育学研究科

** 三重大学教育学部

文章読解は説明的文章を対象とする。

文章読解に関する研究はテキスト側と読み手側の要因に分類されるが、ここでは読み手側の要因に着目する。読み手側要因に関する研究には読解プロセスや読解方略などがある。「熟練した読み手の認知モデル」(ブルーアー, J.T, 2001)では情報入力、単語再認、言語的・文法的処理、テキスト・モデリング、メタ認知的モニタリングというプロセスが提案されている。それぞれのプロセスは作動記憶や長期記憶と連動し、関連しながら読解を進めていくと考えられている。単語再認プロセスでは語彙的アクセスが行われ、ここで読み手の語彙知識が影響すると考えられる。

高橋(1996)は小学校5年生を対象に調査を行い語彙知識が読解に強く影響することを示し、文字単語レベル、文レベル、談話レベルという読解プロセスを提示した(Figure 1)。

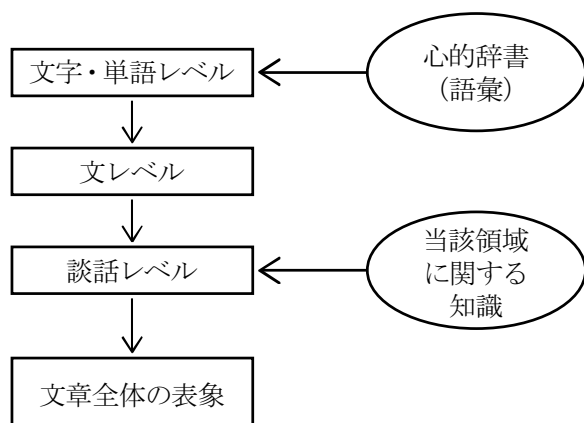


Figure 1 読解プロセス (高橋, 1996)

さらに小学校1年から5年までの縦断的調査を行い、読解に影響する要因として、1・3年生では符号化、リーディングスパン、語彙知識の三つが、5年生になると語彙知識のみが有意であることを明らかにした。

猪原(2012)は小学校1年生から6年生を対象に調査を行い、読書量、語彙力、文章理解力の関係を検証している。その結果、低学年(1・2年生)では読書量は直接には文章理解力には影響せず、読書量から文章理解力への影響は語彙力を經由していることを明らかにした。また、高学年(5・6年生)では読書量は直接的に文章読解力に影響し、語彙力には文章理解力を經由してのみ影響すると報告している。

これらの先行研究は、文章読解における語彙知識の影響が大きいことを示しており、さまざまな教育分野において活用されている。堀場(2015)は中国語または韓国語を母語とする第二言語学習者と日本語母語話者とを対象に語彙知識とテキスト理解との関係を検討

した結果、母語話者については語彙知識の深さがテキスト理解の変動を説明する要因として採択されたことなどを報告している。正確な読解のための既知語率は、95~96%以上必要であるとの報告(小森・三國・近藤、2004)もある。

国語教育においても文章理解を促進するための語彙指導を提案した塚田(1995)や高等学校における語彙指導を提案した加藤(1991)など従来多くの研究・実践がなされてきた。

読解方略に関しては犬塚(2002)が読解方略構造を3因子7カテゴリという形で明らかにし、読解方略尺度を作成した。「意味明確化」「コントロール」からなる「部分理解方略」、「要点把握」「記憶」「モニタリング」からなる「内容学習方略」、「構造注目」「既有知識活用」からなる「理解深化方略」の3因子モデルである(Figure 2)。

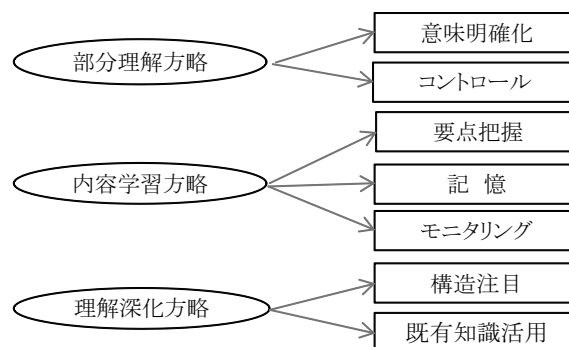


Figure 2 読解方略の構造 (犬塚, 2002)

また、読解方略の3因子は並列な関係にあるのではなく、基礎的レベルの方略として「部分理解方略」、次段階としての「内容学習方略」、より高次の「理解深化方略」がレパートリーが増えるような形で使用されるようになって考えられている。特に「理解深化方略」に関しては、「構造注目」は中高生に比べて大学生の得点が高い、「既有知識活用」においては中学生に比べて大学生の得点が高いという結果が明らかにされている。「内容深化方略」は年齢の高い読み手の方がよく使用する方略であり、これは読みの熟達や背景知識を必要とする方略であるとされている。

読解方略は読解成績との関連が指摘されている。森・笹山(2007)は読解方略と読解成績との関係の検討を行っている。読解方略尺度(犬塚, 2002)をもとに、さらに日常的な読解方略を特定した結果、「内容理解方略」「メタ認知方略」「既有知識活用方略」の3因子構造を得た。大学生211名を対象に大学入試センター試験の国語Iの説明文問題の合計得点と読解方略3因子との関連を検討し、センター試験得点と「内容理

解方略」因子との間に正の相関がみられたことを報告している。

犬塚（2006）は文章理解の困難を主訴とする高校生の読解プロセスの特徴を分析し、その問題点を補助する方略指導を行った。その結果、対象者は指導された方略の意義と機能を理解し、要約作成においても向上が見られ、読解方略活用の変容により、文章内容の統合的理解という側面において改善が見られた。

国語教育における読解方略研究も報告されている（古賀，2014）。間瀬（1995）は中学3年生を対象に説明的文章指導における方略教授の有効性を検討した。その結果、＜内容理解群＞よりも文章構造に関する知識を指導した＜方略教授群＞のほうが関連付けて答えを求めていることから文章構造に関する知識の教授の有効性が明らかにされた。

文章読解には語彙やテキスト固有の背景知識が大きな影響を与えており、読解方略と文章読解の関連についても研究の蓄積がある。しかし、語彙力と読解方略の関連を検証した例は少ない。特に入学者選抜の行われる高等学校において検討されたものは管見する限り見当たらない。

本研究では「就職と進学どちらにも対応する高校」と「進学をA中心とした高校」という特性の異なる2高校において、①それぞれの高校において高校生の語彙数、語彙数と読解方略との関連を明らかにし、②2校間での比較検討を行うことを目的とする。

II 方法

1. 調査協力者

A高校1年に在籍する54人とB高校1年に在籍する78人。

A高校は全校生徒約800名の県立全日制高校である。卒業生の進路状況は約60%が大学、短期大学、専修学校等への進学、約40%が就職であり、進学と就職のどちらの進路希望にも対応する高校である。

B高校は、全校生徒約1,000名の県立全日制高校である。「文武両道の進学校」をモットーに、国内外で活躍できる能力と資質を持つ人材の育成を目指して日々の教育活動が行われている。卒業生の進路状況は、例年国公立大学進学が100名を超え、約90%が四年制大学に進学する。

2. 実施時期

A高校では2015年7月下旬、B高校では2015年9月上旬に実施した。

ただし、A高校では継続的な語彙指導を一学期「国語総合」の授業時間内にほぼ毎時間行っている。

3. 調査課題

1) 語彙数推定テスト

NTTコミュニケーション科学基礎研究所が、単語親密度（天野・近藤、1999）を利用して開発し、ネット上に公開している語彙数推定テストである。新明解国語辞典第四版（三省堂）を基準にしている。5,000～20,000語が小学生レベル、20,000～40,000語が中学生レベル、40,000～45,000語が高校生レベル、45,000～50,000語が大学生レベルという分類（林，1982）が提示されている。本研究においては本テストによって測定された推定語彙数を語彙力として扱う。

2) 読解方略尺度

犬塚（2002）の説明文読解方略を用いた。「部分理解方略」「内容学習方略」「内容深化方略」の3因子、その下位に「意味明確化」「コントロール」「要点把握」「記憶」「モニタリング」「構造注目」「既有知識活用」の7カテゴリ、37項目からなる。

3) 手続き

A高校では第一筆者が授業時間内に一斉配布一斉回収方式での質問紙調査として実施した。B高校では調査に協力する教員が授業時間内に一斉配布一斉回収方式での質問紙調査として実施した。

調査協力者には調査の目的や内容のほか、研究に参加しないことにより不利益を被ることは一切ないこと、本調査において個人が特定されることはないことなどについて書面を用いて説明を行った。

4) 分析の対象

A高校調査において欠席した1名を分析から除外した。B高校調査においては、質問項目の早い段階から回答のない1名を分析から除外した。

III 結果

1. 語彙数推定テスト

語彙数推定テストによって推定されたA高校の平均推定語彙数は25,385、最大値は49,100、最小値は9,800であった。B高校では、平均推定語彙数は31,616、最大値は61,500、最小値は13,800であった（Table 1）。

Table1 語彙数推定テスト得点

	MIN	MAX	M
A高校	9800	49100	25384.91
B高校	13800	61500	31615.58

推定されたレベルはA高校では大学生レベルが2人（3.8%）、高校生レベルが2人（3.8%）、中学生レベルが36人（67.9%）、小学生レベルが13人（24.5%）である。B高校では大学生レベル8人（10.4%）、高校生

レベル7人(9.0%)、中学生レベル50人(64.9%)、小学生レベル12人(15.6%)であった(Figure3)。

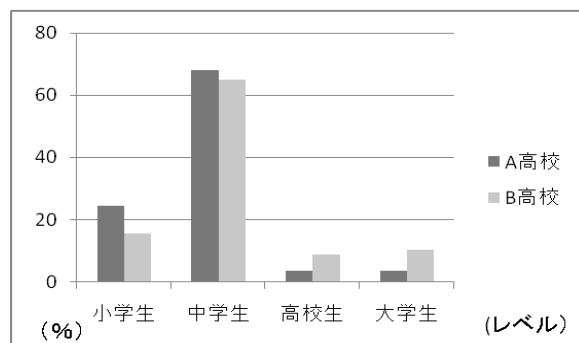


Figure3 語彙数推定テスト レベル別分布

2. 読解方略尺度

読解方略尺度の尺度得点を求めたところ、A高校では「要点把握」2.97、「構造注目」3.03、「意味明確化」3.72、「既有知識活用」3.07、「記憶」3.12、「モニタリング」2.73、「コントロール」3.77であった。

B高校では「要点把握」3.05、「構造注目」2.96、「意味明確化」3.56、「既有知識」2.94、「記憶」2.82、「モニタリング」2.48、「コントロール」3.71であった(Table 2)。

3. 相関分析

語彙数と読解方略下位尺度得点との相関を検討したところ、A高校では相関は見られなかった。

Table 2 読解方略下位尺度得点

		M	SD
A高校	下位尺度		
	要点把握	2.97	0.67
	構造注目	3.03	0.57
	意味明確化	3.72	0.64
	既有知識活用	3.07	0.78
	記憶	3.12	0.51
	モニタリング	2.73	0.65
コントロール	3.77	0.67	
B高校	要点把握	3.05	0.58
	構造注目	2.96	0.64
	意味明確化	3.56	0.71
	既有知識活用	2.94	0.79
	記憶	2.82	0.72
	モニタリング	2.48	0.54
	コントロール	3.71	0.67

Table3 B高校の相関分析

	要点把握	構造注目	意味明確化	既有知識活用	記憶	モニタリング	コントロール
推定語彙数	.16	.35**	.28*	.53**	-.04	.27*	.06

* $p < .05$, ** $p < .01$

B高校では、「構造注目」($r=.35$, $p<.01$)と「意味明確化」($r=.28$, $p<.05$)と「モニタリング」($r=.27$, $p<.05$)に弱い正の相関が、「既有知識活用」($r=.53$, $p<.01$)に中程度の正の相関がみられた(Table3)。

4. t検定による分析

2校間比較をするために、語彙力と読解方略尺度下位尺度得点とのt検定を行ったところ、「記憶」 $t(129) = 2.67$, $p<.01$ (A>B)、「モニタリング」 $t(129) = 7.08$, $p<.001$ (A>B)、においてそれぞれ有意差が見られた(Table 4)。

Table4 A高校とB高校の平均値・SD・t検定の結果

	A高校		B高校		t値
	M	SD	M	SD	
要点把握	2.97	0.67	3.05	0.58	0.70
構造注目	3.03	0.57	2.96	0.64	0.58
意味明確化	3.72	0.64	3.56	0.71	1.30
既有知識活用	3.07	0.78	2.94	0.79	0.92
記憶	3.12	0.51	2.82	0.72	2.78 *
モニタリング	2.73	0.65	2.48	0.54	2.38 *
コントロール	3.77	0.67	3.71	0.67	0.50

* $p < .05$

IV 考察

本研究では「就職と進学どちらにも対応する高校」と「進学に対応する高校」という特性の異なる2高校において、①それぞれの高校において高校生の語彙数、語彙数と読解方略との関連を明らかにし、②2校間での比較検討を行うことを目的としていた。

1) 語彙数

A高校の平均推定語彙数は25,385、最大値は49,100、最小値は9,800であった。B高校では、平均語彙数は31,616、最大値は61,500、最小値は13,800であった。平均値、最大値、最小値ともにB高校の方が高い結果から、B高校生徒の方が語彙数が多いことが示唆された。レベル別の観点からは、B高校の方が小学生レベルが少なく、大学生レベルが多いことから、語彙数の多い層が厚いことが明らかになった。

2) 語彙数と読解方略との関連

①読解方略活用 -7カテゴリレベル

相関分析においてはA高校では相関がみられなかったが、B高校では「既有知識活用」に中程度の正の相関、「構造注目」「意味明確化」「モニタリング」に弱い正の相関がみられた。このことから、A高校

の生徒は、語彙数の多寡に関係なく方略活用をしている実態が示唆された。B 高校では、語彙数と読解方略とに関連があり、語彙数の豊かな生徒と読解方略を活用できていることとの関連が明らかになった。

両校の差異を検討するために行った t 検定では、「記憶」「モニタリング」に有意差が見られた。「記憶」「モニタリング」においては A 高校の得点が高かった。このことから A 高校の生徒は、テキストの内容を記憶し、自分の理解状態をモニタリングしながら文章読解をしていることが示唆された。

②読解方略活用 -3 因子レベル

B 高校では「内容深化方略」に属する「構造注目」「既有知識活用」、「内容学習方略」に属する「モニタリング」、「部分理解方略」に属する「意味明確化」においてそれぞれ中程度から弱い正の相関がみられた。語彙力のある生徒は基礎的なレベルから高度なレベルである方略すべてが活用されており、一般的な読解方略活用が行われていることが示唆されたと言える。

3) 今後の課題

本研究では「進学と就職に対応する高校」では語彙力と読解方略とに関連がなく、「進学に対応する高校」では関連があることが明らかになった。

先行研究では文章読解に対して語彙力や当該領域の背景知識の豊かさが影響することが明らかになっているが、「進学と就職に対応する高校」に在籍する高校生に対する文章読解指導に関しては、適切な方略指導も必要であるかもしれない。

また、t 検定の結果から、A 高校では 2 方略の活用方略が挙げられたが、これらはあくまでも生徒自身の認知によるものであり、実際にその方略をどの程度活用できているかを測定したのではないことも課題である。

引用文献

- 天野成昭・近藤公久 (1999). NTT データベースシリーズ「日本語の語彙特性」第 1 巻 単語親密度 三省堂
- Bruer, J.T. (1993). *Schools for Thought. A Science of Learning in the Classroom*. Cambridge, MA: The MIT Press.
- (J.T. ブルーアー 松田文子・森敏昭 (監訳) (2001). 授業が変わる - 認知心理学と教育実践が手を結ぶとき 北大路書房 pp.151-188.)
- 林大 監修 (1982). 図説日本語 角川書店
- 堀場裕紀江 (2015). 語彙知識とそのテキスト理解との関係: 中国語・韓国語を母語とする L2 言語学習者と日本語母語話者の比較研究 言語科学研究: 神田外語大学大学院紀要, 21, 23-46.
- 猪原敬介・上田紋佳・塩谷京子・小山内秀和 (2013). 日本人

- 小学生児童における読書量・語彙力・読解力の関係 (1) 教育心理学会第 55 回総会
- 犬塚美輪 (2002). 説明文における読解方略の構造 教育心理学研究, 50, 152-162.
- 犬塚美輪・高橋麻衣子 (2006). 文章理解の困難を主訴とする高校生への読解方略指導 - 読解プロセスの観点から - LD 研究, 15 (3), 330-338.
- JILPT 独立行政法人労働政策研究・研修機構 (2015). 平成 25 年度生涯学習施策に関する調査研究「専修学校における生徒・学生支援等に対する基礎調査」調査研究報告書
- JILPT 独立行政法人労働政策研究・研修機構 (2015). 調査シリーズ No.138 「大学等中退者の就労と意識に関する研究」
- 加藤宏文 (1991). 高等学校における語彙学習の一方法 国語科教育, 38, 83-90.
- 古賀洋一 (2014). 説明的文章の読みの授業実践における読解方略指導の展開 国語科教育, 76, 23-30.
- 小森和子・三國純子・近藤安月子 (2004). 文章理解を促進する語彙知識の量的側面 - 既知語率の閾値探索の試み 日本語教育, 120, 83-92.
- 間瀬茂夫 (1995). 説明的文章指導における方略教授の有効性 - 文章構造の把握を中心に - 国語科教育, 42, 103-112.
- 森 年宏・笹山郁生 (2007). 説明文の読解方略と読解成績との関係 福岡教育大学紀要, 56, (4) 99-111.
- 高橋 登 (1996). 学童期の子どもの読み能力の規定要因について - componential approach による分析的研究 - 心理学研究, 67, 186-194.
- 高橋 登 (2001). 学童期における読解能力の発達過程 - 1-5 年生の縦断的な分析 教育心理学研究, 49, 1-10.